

これからの国語科の役割と指導方法

横浜国立大学教授 高木まさき



1958年、静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語ワーキンググループ委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。「ことばと学びをひろく会」会長。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）など。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。

前回の学習指導要領改訂から約十年。子どもたちを取り巻く社会情勢は大きく変動し、さらに今後も、これまでの枠組みでは対応できない課題が生じてくると予想されます。こうした背景を受け、新しい学習指導要領は、どんな子どもを育てることを目指しているのか、いっしょに考えていきたいと思います。

1 二〇三〇年の社会を見据えて —学習指導要領改訂の背景—

今回の学習指導要領の改訂の背景について、中央教育審議会の答申（二〇一六年十二月・以下「答申」）では、現在の子どもたちが社会人となる二〇三〇年を念頭に置き、「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難」としたうえで、「社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば、難しい時代になる」と提えています。

欧米の研究者によると、将来、子どもたちの六五％は、現在存在していない職業に就くことになったり、今後十～二十年程度

で現在の仕事の半数近くが自動化されたり、人工知能に取って代わられたりするという「未来予測」もなされています。つまり、現在の学校での学びが、はたしてこれからの社会で通用していくのか、という大きな問いが投げかけられているのです。

さらに、学校現場の現実的な問題として、学力格差の広がりということもクローズアップされてきました。学力低位の子どもをいかにすくい上げていくかは、喫緊の課題となっています。

新しい学習指導要領では、こうした時代の流れの中で、子ども一人一人が未来の創り手として、決まった答えのない課題に積極的に取り組み、試行錯誤しながら新しい

価値を創造できるようにすることを目指しています。

2 「学びの地図」の提示 —新しい学習指導要領の理念—

このような背景に基づき、新しい学習指導要領では、これからの社会を創り出す子どもたちが学校教育を通じて身につけるべき資質・能力とは何かを明らかにした「学びの地図」としての枠組みづくりが図られました。そこでは、教育課程が、学校と社会や世界との接点になり、現在の子どもの教育と未来とをつなぐ役割も期待されています。

次項では、①②について、具体的にどのように変わったかを解説します。

3 「見方・考え方」を踏まえた指導を—国語科はどう変わるのか—

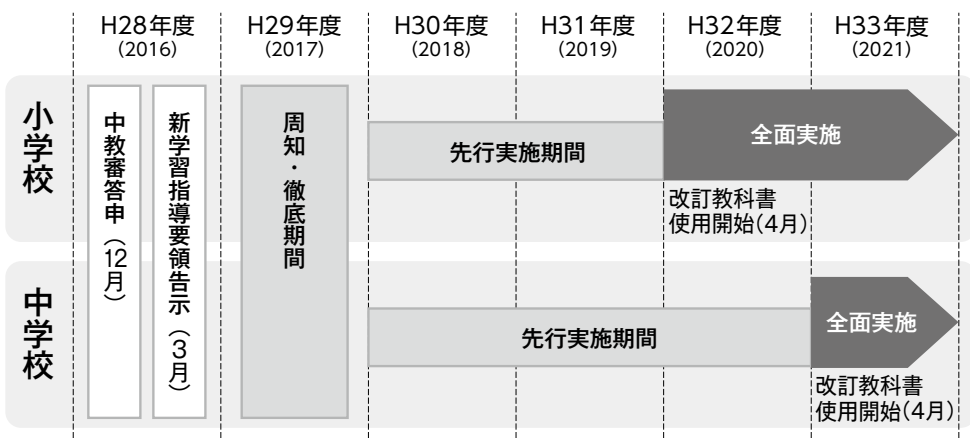
まず、構成上で現在の学習指導要領と大きく変わったのは、「目標」と「内容」です。前項で述べた「①何ができるようになるか（資質・能力）」を次の三つの観点に分け、それぞれに対応した目標が立てられています。

- ・ 知識及び技能
 - ・ 思考力、判断力、表現力等
 - ・ 学びに向かう力、人間性等
- また、「内容」は、それぞれ次のように二本柱で再編されました。

知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方の情報 (2) 話や文章に含まれている情報の扱い方 (3) 我が国の言語文化
思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと

実際の学習内容・指導事項については、現在の学習指導要領と大幅な変更はありません。ただ、言語能力の育成という点で、大きく五つの改善がなされています。

■ 新学習指導要領 実施スケジュール



そうした改善のために、答申では六つのポイントが挙げられています。ここでは直接国語科の指導に関わる次の三点を挙げておきます。

- ① 何ができるようになるか(資質・能力)
- ② どのように学ぶか(学習・指導方法)
- ③ 何が身についたか(学習評価)

①は、従来の「(子どもが) 何を知っているか」「(教師が) 何を教えるのか」から大きく転換しています。「何ができるようになるか」は、言い換えれば「(国語を) 何のために学ぶのか」「(国語を学んで) どんな力が身につくのか」という教科の意義を明確化したものです。

国語科においては、「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」を「言葉による見方・考え方」と位置づけ、教科の本質的な意義としています。これは、例えば説明的な文章を読むとき、社会科や理科ならば書かれている内容を理解するところまでが求められますが、国語科では、内容がどう論理的に表現されているか、どう書かれているからわかりやすいのか、などについて考えることを意味しています。

■ 言語活動例一覧

	小学校1・2年	小学校3・4年	小学校5・6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
	A 話すこと・聞くこと					
ア	紹介や説明、報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて声に出して確かめたり感想を述べたりする活動。	説明や報告など調べたことを話したり、それらを聞いたりする活動。	意見や提案など自分の考えを話したり、それらを聞いたりする活動。	紹介や報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問したり意見などを述べたりする活動。	説明や提案など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問や助言などをしたりする活動。	提案や主張など自分の考えを話したり、それらを聞いて質問したり評価などを述べたりする活動。
イ	尋ねたり応答したりするなどして、少人数で話し合う活動。	質問するなどして情報を集めたり、それらを発表したりする活動。	インタビューなどをして必要な情報を集めたり、それらを発表したりする活動。	互いの考えを伝えるなどして、少人数で話し合う活動。	それぞれの立場から考えを伝えるなどして、議論や討論をする活動。	互いの考えを生かしながら議論や討論をする活動。
ウ		互いの考えを伝えるなどして、グループや学級全体で話し合う活動。	それぞれの立場から考えを伝えるなどして話し合う活動。			
	B 書くこと					
ア	身近なことや経験したことを報告したり、観察したことを記録したりするなど、見聞きしたことを書く活動。	調べたことをまとめて報告するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。	事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書く活動。	本や資料から文章や図表などを引用して説明したり記録したりするなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。	多様な考えができる事柄について意見を述べるなど、自分の考えを書く活動。	関心のある事柄について批評するなど、自分の考えを書く活動。
イ	日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたいことを書く活動。	行事の案内やお礼の文章を書くなど、伝えたいことを手紙に書く活動。	短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	行事の案内や報告の文章を書くなど、伝えるべきことを整理して書く活動。	社会生活に必要な手紙や電子メールを書くなど、伝えたいことを相手や媒体を考慮して書く活動。	情報を編集して文章にまとめるなど、伝えたいことを整理して書く活動。
ウ	簡単な物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	詩や物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	事実や経験を基に、感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について文章に書く活動。	詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動。	短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動。	
	C 読むこと					
ア	事物の仕組みを説明した文章などを読み、分かったことや考えたことを述べる活動。	記録や報告などの文章を読み、文章の一部を引用して、分かったことや考えたことを説明したり、意見を述べたりする活動。	説明や解説などの文章を比較するなどして読み、分かったことや考えたことを、話し合ったり文章にまとめたりする活動。	説明や記録などの文章を読み、理解したことや考えたことを報告したり文章にまとめたりする活動。	報告や解説などの文章を読み、理解したことや考えたことを説明したり文章にまとめたりする活動。	論説や報道などの文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて議論したり文章にまとめたりする活動。
イ	読み聞かせを聞いたり物語などを读んだりして、内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする活動。	詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。	小説や随筆などを読み、考えたことなどを記録したり伝え合ったりする活動。	詩歌や小説などを読み、引用して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。
ウ	学校図書館などを利用し、図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み、分かったことなどを説明する活動。	学校図書館などを利用し、事典や図鑑などから情報を得て、分かったことなどをまとめて説明する活動。	学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する活動。	学校図書館などを利用し、多様な情報を得て、考えたことなどを報告したり資料にまとめたりする活動。	本や新聞、インターネットなどから集めた情報を活用し、出典を明らかにしながら、考えたことなどを説明したり提案したりする活動。	実用的な文章を読み、実生活への生かし方を考える活動。

(1) 語彙指導の系統化

【知識及び技能】では、小・中九年間を通して語彙指導が系統化されました。中学校は、「事象や行為、心情を表す語句」(二年)、「抽象的な概念を表す語句」(二年)、「理解したり表現したりするために必要な語句」(三年)が取り上げられ、話や文章の中で使いながら自分の言葉として使いこなせるようにするとともに、語感を磨くことが求められています。こうした語彙指導は、現在の教科書では、「感想を表す言葉」(二年P295)、「感情を表す言葉」(二年P292)、「抽象的な言葉」(三年P273)を使いながら整理し、さらに「続けてみよう」(一年P24、二年P14)などを利用しながら充実させていくことができるでしょう。

(2) 情報の扱いに関する項目の設定

同じく【知識及び技能】に、「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」などの「情報と情報との関係」や、「比較や分類」「関係付け」などの「情報の整理の仕方」に関する項目が立てられました。

この技能を養うには、例えば、説明的な文章では、文章中の情報の関係を視覚的に捉えて整理させることが効果的です。そのために、デジタル教科書などICT機器

を活用するのもよいでしょう。

(3) 「考えの形成」の重視

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全ての領域で、学習過程の中で「自分の考えの形成」を図ることが明確化されました。これは、現在の教科書でも、「自分の考えをもとう」(学習の手引き)などで触れていることですので、より意識的に指導を続けていただきたいと思います。

(4) 主体的・対話的で深い学び

答申までの段階では「アクティブ・ラーニングの視点」として示されていたものです。前項で述べた「②どのように学ぶか」に対応しています。

「主体的・対話的」については、ある程度イメージしやすいと思いますが、「深い学び」が少し捉えづらくもかもしれません。これは、具体的にいうと、例えば物語を読む学習では、ただストーリーを追うだけでなく、題名、人物、場面、心情など、読み取ったことの関係性をより多く発見し、読み方について自覚していく学びのことです。そのためには、教科書の巻末折込「文学的(説明的)な文章を読むために」を使いながら、読みの観点を常に意識させていく指導が

切になります。

(5) 言語活動例の整理・系統化

【知識及び技能】と【思考力、判断力、表現力等】は言語活動を通して身につけていくことが大切です。これは、現在の学習指導要領の考えと変わっていません。今回の改訂では、左ページの「言語活動例一覧」にあるように、言語活動例を整理・系統化し、現場の負担軽減とともに、創意工夫の幅を広げられるように改善しています。

(1)～(5)の項目は、国語科の「見方・考え方」である。「対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付け」ながら言葉への自覚を高めるための改善といってもいいでしょう。

新しい学習指導要領の実施にあたって、先生方には、必ずしも大幅な方向転換を迫るものではないと考えられますが、国語科の「見方・考え方」を踏まえ、言語活動をより充実させることで、言葉への自覚を高め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けてご尽力いただければと思います。